

石碑に、墓石に
知っていますか？
国産石の良さ

源平合戦の舞台となった屋島の東に位置する五剣山が、庵治石の故郷。中でも埋蔵量が多い「大丁場」では、最高の品質の石が採れる。



日 本には幾つもの銘石があり、悠久の歴史をその身に刻み、風化することなく現代へと伝えている。

石材は奈良時代から墓石として用いられ、鎌倉時代には五輪の塔や社寺の建造物として加工されるようになった。江戸時代には、庶民文化の興隆とともに多くの「石職人」が誕生、庶民向け墓石の需要を支えた。

一方、1965年ごろから、海外産の安価な輸入石が増え、急速にシェアを伸ばしていく。現在では、加工費が安価な中国などで原石を加工した後、低価格で完成品を流通させるといったことも行われ、さらに石材の低価格化が進行。国産石材を国内加工した「純国産」の製品は高級品となり、シェアは極めて小さくなりつつある。

しかし国産石材には、千年の時を超えて思いを刻むにふさわしい、大きな魅力がある。

長くそこにあるからこそ変化に強く風土になじむ

四季による温度や湿度の差といった激しい環境変化に耐え抜いてきた国産石材には、日本の風土に適合した性質が備わって

いる。青磁の輝きを放つといわれる「伊予大島石（愛媛県）」、淡紅色の華やいだ風合いが特徴の「万成石（岡山県）」、石質が硬く吸水性が低いことから大坂城などにも使われた「北木石（岡山県）」、独特なつやときめ細やかな石肌を「本小松石（神奈川県）」など、日本には幾多の銘石があり、2000〜1200年の長きにわたり、墓や建物を守り続けてきた。こうした石材が実際に使用されている建造物や墓を見れば、経年変化の少なさや耐久性がわかり、銘石と呼ばれるゆえんを実感できる。

石材はその種類ごとに特性が異なり、魅力を最大限に生かすためには、それぞれに合わせた加工法を施す必要がある。例えば研磨によってつやを引き出す際にも、石種の特性を踏まえ、使用する砥石の種類や加工時間を細かく調整する熟練の加工技術が求められる。これを実現できるのは、国内の厳選された加工業者のみであり、彼らが国産石材を手掛けることによって初めて、石材の真価が発揮される。しかし海外の加工国では、さまざまな石種を同じ加工法で製品化しているとされる。特に中国

注文の大きさに合わせて石を割るには、職人の技量が問われる。細かな加工もほぼ手仕事で、硬く粘りのある石を少しずつ丹念に彫っていく。

では、加工時間やコストを切り詰めて作られるせいか、仕上がりが劣る製品が多く見られる。安さには理由があるのだ。
彫刻家、イサム・ノグチをとりこにした「庵治石」
数ある国産石材の中でも、特に銘石の誉れ高いのが、「庵治石」だ。

まるでかすみがないびいていような美しいたたずまいを持つ庵治石は、「天下の銘石」として日本人に愛され続けてきた。古くは平安時代、京都・石清水八幡宮の再興に用いられ、江戸時代には高松城築城や大坂城大改築にも使われた。近代でも、首相官邸の石庭や道後温泉本館の浴槽などに庵治石が採用されている。



20世紀を代表する彫刻家の一人であるイサム・ノグチ氏は、庵治石の魅力に引かれ、その産地にアトリエを構えて20年以上を過ごした。高松空港にほど近い場所にあるオブリエ「TIME AND SPACE」は、庵治石を使った代表的な作品といえる。

500年たっても刻まれた文字が読める

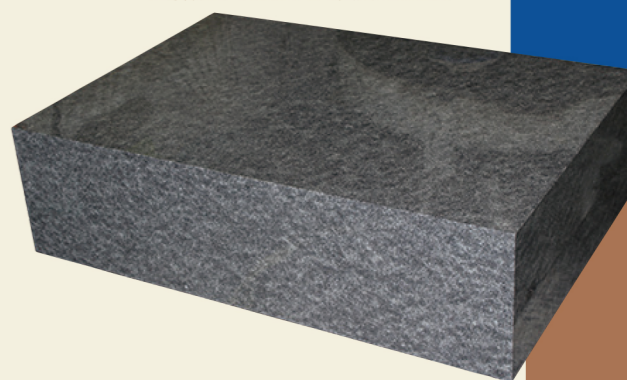
庵治石の故郷は、香川県の庵治町と牟礼町にまたがる霊峰・五剣山の麓にある。この地の岩盤には亀裂が非常に多く入り、大きな石が産出されにくくなっ

ている。それ故、採石されたうちの3〜5%のみしか、墓石や彫刻材として製品化できず、他は建築の土台石や埋め立て用の石となる。この希少性も、庵治石が「最高級の墓石」となっている理由の一つだ。
庵治石の大きな特徴は、「斑が浮く」と称されるまだら模様にある。ちりばめられた黒雲母が、磨くほどに浮かび上がって見え、平たんはずの石の模様にも奥行きが現れる……。この現象は、世界でも庵治石のみにしか確認されていない。

経年変化に強いことでも知られ、石材試験でもそれが裏付けられている。石は、硬いほど強度が高く、水分が少ないほど変色や割れに強いのだが、庵治石の硬度は水晶と同じ「7」で、吸水率は0・15%と、数ある石材の中でもトップクラスの値となっている。風雨による劣化にも強く、500年以上も前に刻まれた文字がまだ残っている例もある。

ただ、その硬さ故、加工するのが難しく、「職人泣かせの石」とも呼ばれてきた。昔から、一流の技を持った熟練の職人のみが庵治石を扱うことを許され、

庵治石は、石目が粗く淡い色合いの「中目」と、石目が細かく青みを帯びた「細目」に分類され、細目がより良質とされる。



至高の国産石材

庵治石の魅力

彫刻家も愛した歴史と美、実用性を兼ね備えた銘石

かすみのような幻想的な模様が特徴の庵治石は、国産石材の代表格ともいえる。数百年の時を経ても変わらずぬ石質と、熟練の名工が引き出す深みある光沢は国産・庵治石ならではの魅力。時を超えた思いを刻むお墓は、素材の石選びにもこだわりたい。

その技は現在でも庵治の地に連綿と受け継がれている。庵治石の真価を引き出す技として、石面を平らに仕上げ「たたき上げ」という手作業の加工技術がある。その技術に精通した職人は日本でも数人しかおらず、そのほとんどは庵治の地で腕を振るっている。また、独自の斑が浮かび上がるような深みのある光沢を備えた「磨き」を実現できるのも、職人たちの高い研磨技術のたまもの。こうして鍛え抜かれた名工の手によって新たな命を吹き込まれることで初めて、庵治石は「天下の銘石」となる。

日本の自然美が詰まった極上の石材と、古来より受け継がれる伝統の技。それらが結集して生まれる最高峰の銘品が、庵治石の墓石である。
もし実物を見たいなら、東京都・南青山にある古刹、「梅窓院」がお薦めだ。墓石はもちろん、寺標や塀などにも庵治石が使われている。事前予約すれば院内の見学も可能であり、庵治石の魅力を堪能できるだろう。

梅窓院の寺標は、一つの庵治石を削り出して作られている。磨き上げられた部分と、「たたき上げ」の部分のコントラストが見事。



問い合わせ先
株式会社彩石
〒107-0062 東京都港区南青山2-26-34-7F
TEL:0120-148324 URL: <http://www.saiseiki.net/>